



Title	スポーツを通じた進路選択の歴史的成立過程に関する一考察
Author(s)	高田, 俊輔
Citation	大阪大学教育学年報. 2016, 21, p. 117-131
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/57425">https://doi.org/10.18910/57425</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# スポーツを通じた進路選択の 歴史的成立過程に関する一考察

高田 俊輔

## 〔要旨〕

2007年の「プロ野球裏金問題」をきっかけにして、「野球特待生問題」が浮き彫りになった。野球特待生とは、野球の技術優秀者に対して、学費の免除がされたり、奨学金が支給されたりするといった特別な待遇を受ける生徒・学生のことである。スポーツ文化が地域中心に発展してきたヨーロッパとは違い、日本におけるスポーツは、主として学校を中心に運動部活動という形で発展してきたということからも、スポーツ特待生たちの進路形成は日本特殊な現象であるともいうことができよう。

本稿の目的は、このような日本特殊なスポーツを通じた進路形成の歴史的成立過程を、西洋における近代スポーツ成立から、わが国の近代スポーツとしての野球の受容、そして現代に至るまでの野球の変遷を辿っていくことによって明らかにしていくことである。分析に際しては、P. ブルデューやC. シリングによって展開された身体資本概念に依拠し、身体資本の生産と変換の時代的変遷を描き出した。

その結果、明治期のエリート養成を目的とした「武士道野球」が、マスメディアイベント化した「甲子園野球」へと変容していくことによって、選手の身体が「観られる身体」と化し、スポーツを通して培われた身体資本が「評価」され、他の様々な資本に変換されるようになったことが明らかになった。

## 1. はじめに

### 1-1. 端緒としての「野球特待生問題」

2007年3月、野球界を揺るがすような事件が起こった。「プロ野球裏金問題」である。プロ野球球団が、アマチュア野球の二人の選手に対して「栄養費」という名目のもと金品の授与を行っていたのである。当時の日本学生野球憲章の第13条には以下のように記されている。

選手または部員は、いかなる名義によるものであっても、他から選手又は部員であることを理由として支給され又は貸与されるものと認められる学費、生活費その他の金品を授けることはできない（日本学生野球憲章第13条）。

現金を受けた選手は、重大な日本学生野球憲章違反と見なされたため、大学野球部の退部と一年間の謹慎処分が科されることになった。その後、日本高等学校野球連盟（以下、高野連）の調査により、現金を受け取った選手の所属していた高校が、野球特待生を採用しているということが発覚した。野球特待生とは、野球の技術優秀者に対して、学費の一部、もしくは全てを免除されたり、奨学金が支給されたりといった特別な待遇を受ける生徒や学生のことである。この野球特待生は、日本学生野球憲章第13条の解釈に関する議論を呼び起こすことになった。つまり、第13条において明記された「他から」とは、高校野球選手が所属する

学校を含めるのか否かということである。これに対する高野連側の見解は以下のようなものであった。

高校野球は、特に教育の一環としての活動を強調しており、特待生制度は、未成年の高校選手を野球偏重の生活に導きかねない（朝日新聞社 2007年4月20日付朝刊）。

特待生制度は野球偏重の生活、言い換えれば「野球だけやっていたらいい」という意識を高校生選手に持たせることになってしまい、教育的ではないという主張である。しかし、その後の調査で野球特待生制度を実施している高校は、延べ376校の7971人にも及ぶことが判明し、社会問題化することになった。事態を重く見た高野連は、特待生制度について「部員登録する特待生は各学年5人以下が望ましい」、「学業が一定基準を満たしていること」といったガイドラインを提示する。連日の新聞紙上を賑わせた野球特待生問題は、条件付きという形ではあるが、特待生の採用を認めるという形で収束したのである。

私たちは、このような野球特待生問題を目にした時、そこで議論されている野球特待生という存在を、「野球に特化して生活する生徒」、あるいは「特別な教育を受ける生徒」というように感じることはないだろうか。

栗山靖弘は、このような高校野球における野球特待生が行う、野球を軸にした進路形成の実態を野球部員達からのインタビュー調査から分厚い記述を試みている（栗山 2011）。そこで描かれているのは、部活動を通して培った競技能力や身体能力、指導者やOBなどの人脈を巧妙に活かして進路形成を試みる野球特待生たちの姿である。彼らは、学力や偏差値といった基準を基にして進路形成を行うような大衆受験社会とは異なった論理で自らの「サバイバルストラテジー」（黄 2005）を練っているわけである。

無論、スポーツ文化が地域中心に発展してきたヨーロッパとは違い、日本におけるスポーツは、主として学校を中心に運動部活動という形で発展してきたということからも、スポーツ特待生たちの進路形成は日本特異的な現象であるともいうことができよう。

アメリカの文化人類学者のミラー（Miller 2011）は、教育を管轄する文部科学省がスポーツを管轄している点について言及している。ミラーによると、スポーツを管轄する行政機関の英語表記をまとめる中で、日本以外の国は、「文化・メディア・若者・健康・老化・伝統」などに関連づけられているのに対して、日本の文部科学省（Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology）は、「教育・科学・技術」と関連づけている点で特徴的であるという。

本稿の目的は、このような日本特異的なスポーツを通じた進路形成の歴史的成立過程を、西洋における近代スポーツ成立から、わが国の近代スポーツとしての野球の受容、そして現代に至るまでの野球の変遷を辿っていくことによって明らかにしていくことである。

## 1-2. 先行研究の検討

これまで、わが国におけるスポーツ研究に関しては、体育学領域における研究が多く散見される。特に、スポーツ社会学やスポーツ心理学の方法論を用いた、部活動への「参加・適応」、部活動の「機能・効果」、部活動を指導する「顧問教師」に関する研究が多いように感じられる。本稿が対象とするような、野球に関するこれまでの研究は、日本が受容した近代スポーツの一つである野球に着目することによって、様々なスポーツに関するイデオロギー的側面を明らかにしてきた。たとえば、ガス&ミルズの制度概念を分析枠組みとしながら、プロフェッショナルリズムの生成と経済制度の野球への介入を明らかにした菊幸一による歴史社会学的研究（菊 1993）や、野球害毒論争といったスポーツに対する批判言説に着目することによって「日本のスポーツ観」を読み取ろうとした小野瀬剛志による研究（小野瀬 2002）などが挙げられよう。またメデイ

ア史の観点から、マスメディアと野球の関係を通史的に描き出すことによって、日常では見えにくいスポーツに対する社会意識や価値観を顕在化させた有山輝雄の研究（有山 1996）がある。

これらの研究では、社会学や歴史学の方法論をもとに、私たちが自明のものとする「日本的スポーツ観」を顕在化させていたといえる。また、本稿に大きなパースペクティブを与えてくれる研究としては、清水論による研究（清水 1998）が挙げられる。清水は、私たちが自明のものと認識する甲子園という「物語」の起源を、明治期の野球に関する社会的、文化的コンテクストに求めることによって、固定化された私たちの認識枠組みの歴史性を浮かび上がらせる。人々が、無意識のうちに取る「心性」や「態度」の歴史性を探るという点では、本稿と近い立場であると考えられる。

以下では、まず2節において、本稿の視点として、P. ブルデューによって展開された文化資本概念を基に、スポーツ特待生たちの能力、資質について考察する。そして3節にて、エリアス&ダニングによって展開されたスポーツ化の過程を参照しながら、西洋におけるスポーツ、そして競技者の身体そのものの変容過程を明らかにする。最後に4節においては、明治期日本において受容された近代スポーツの一つとして野球を取り上げ、日本特殊なスポーツを通じた進路形成という現象がいかにして形成されてきたのかを考察していく。

## 2. 身体資本の生産と変換

### 2-1. 文化資本

ほとんどのスポーツが学校運動部活動として行われる日本において、スポーツ特待生のように、競技能力や身体能力を基に進路形成していく者の多くは、小学校から中学校、高校、大学というように学校段階が上がる度に選抜されていくと考えられる。いわゆる、メリトクラシーの議論である。もちろん、学校段階が上がるごとに、スポーツ競技のレベルも上がっていくことになり、選抜は激化していくと考えられよう。ここでは、このようなスポーツを通じた選抜原理を、便宜的に「スポーツ的選抜」と呼ぶ。そして、厳しいスポーツ的選抜を勝ち抜いた少数の勝者達が、最終的に「プロスポーツ選手」になることができるのであり、その他大勢の敗者達は、学力等を基にして選抜されていく大衆受験社会に生きる道を求め、スポーツを継続するにしても、趣味程度に活動の幅を縮小するであろう。

このように考えると、日本におけるスポーツ的選抜は、学校段階が上がっていくにつれて選抜が激化するという点において、大衆受験社会と同様の構造を持っているといえる。これは、大衆受験社会の選抜原理と、スポーツ的選抜とが、学校という機関で同時に機能しているということに起因する。スポーツ的選抜における選抜に選ばれなかった者は、大衆受験社会に参加していくということを考えると、スポーツ的選抜は、大衆受験社会の下位システムであるといえるだろう。

このようなスポーツ的選抜を考えていく上で欠かせないのは、選手達が選抜される際に基準となるような能力や資質である。一般的に考えられるのは、特定のスポーツ競技に適した競技技術や身体能力であろう。しかし、このような競技技術や身体能力だけが、スポーツ的選抜社会における選抜の基準になるのだろうか。換言すれば、50メートル走を5秒台で走る者と、6秒台で走る者では、単純に5秒台で走る者がスポーツ的選抜における勝者となることになるのだろうか。

思えば、学歴が選抜の基準になるような大衆受験社会も、けっして知的能力だけが選抜の基準になるわけではなかった。そこでは、P. ブルデューがいうような「文化資本」（ブルデュー 1986 p.18）の存在が、大衆受験社会において有利に働くことになるのである。文化資本とは、経済資本のように数的に定量化する

ことはできないが、社会生活において、ある種の資本として機能することができる文化的要素のことである。このような文化資本を蓄積し、他の資本へ転換することによって、人々は「ディスタンクシオン」(ブルデュー 1990) する。すなわち、他者との違いを強調し、自己を引き立たせるような卓越化戦略を試みるのである。

たとえば、クラシック音楽のような高尚な音楽を幼い頃から接する子どもについて考えてみよう。クラシック音楽は、ポピュラー音楽に比べて正統文化である。一方、学校で伝達される知は、一般的な文化というよりも、このような正統文化に関連するものである。よって、クラシック音楽のような正統文化に幼い頃から触れていた経験は、学校で伝達されるような知をすんなりと受け入れる素地を形作ることになり、そこで培われた文化資本は、学歴資本へと容易に転換されることになる。なぜなら、幼い頃からクラシック音楽に馴染みのある子どもは、劇場やコンサート会場で静かに座ってクラシック音楽を聴くといった身体技法を身体化することによって、教室で静かに座って先生の話の話を聞くといった姿勢を自然と身につけることができるようになるからである。

このように、様々な文化活動を身体へと刻み込むことによって獲得する文化資本の形態を、ブルデューは文化資本の「身体化された様態」(ブルデュー 1986 p.21 以下、身体化された文化資本と表記)と呼ぶ。上述したようなクラシック音楽と同様に、スポーツも文化の一形態であると考えられるならば、スポーツを通して培われるような、身体化された文化資本とはどのようなものか。以下では、ブルデューの身体化された文化資本を基にして議論された「身体資本」概念について見ていこう。

## 2-2. 身体資本

ブルデューは、身体化された文化資本の特性に関して以下のように述べている。

文化資本の大部分の特性は、その基本的な様態において、文化資本というものが身体に結びついており、身体化を前提にしているという事実からひきだされる。文化資本の蓄積は、身体化を要請する (ブルデュー 1986, p.21)。

「身体に結びつく」とは、文字通り、学習や経験を通じて獲得した知識や技能を、身体の一部と化し、社会生活においていつでも動員できる状態にすることである。身体化された文化資本の例としては、前述したようなクラシック音楽を聴く姿勢といった身体所作の獲得や、服装や化粧といった容姿に関するものなどが挙げられよう。音楽や絵画に関する「趣味」や、美しい容姿といった「感性」を身体化することによって、当人は卓越化を目指すことになる。また、訓練によって身体化された技能という点においては、本稿が対象とするようなスポーツも文化資本の範疇に入れることができよう。スポーツを通じた身体の鍛錬は、体型や姿勢が矯正され、しぐさや立ち居振る舞いに変化するということからも、身体化された文化資本がもたらす重要な利潤である。具体例としては、フィットネスクラブが挙げられよう。フィットネスクラブに通う者は、体力増強とともに、健康的な身体を形作ることを目的としており、スポーツを通じた卓越化戦略を試みているといえる。

このようなブルデューによる身体に関する分析は、彼自身の経済学批判<sup>(1)</sup>からも見て取れるように、労働力の売買における身体の経済学的価値だけでなく、現代社会において身体が様々な形態で商品化されていく過程、すなわち「身体資本」として機能していく過程をも視野に含まれている。

C. シリングは、このようなブルデューの身体観を踏まえた上で、身体資本の生産と変換について以下のように述べる。

身体資本の生産とは、社会において有意な価値を有していると認められるような身体を生成することを意味する。一方、身体資本の変換とは、労働や余暇などの身体的活動を他の形態の資本へと変換することである。すなわち、身体資本は経済資本（貨幣、財、サービス）や文化資本（学歴や教育機会）、社会関係資本（人間関係等のネットワーク）へと頻繁に変換されるのである（Shilling 1993 p111）。

このような身体資本の生産と変換においては、スポーツが大きな役割を担っているといえる。シリングは、イギリスにおける Polo やゴルフなどのエリートスポーツにおける身体資本の生産と変換について、以下のよう

（Polo やゴルフなどを行うことによって、）子どもは、エリートスポーツに内在するような、エリートとしてのマナーや立ち居振る舞いを身につけていく。それによって、その子は将来的に「社会関係資本」や「文化資本」を獲得しやすくなるであろう（Shilling 1993 p.120 括弧内筆者）。

「社会関係資本」とは、人脈のような、人々の信頼や人間関係のことを指す。Polo を行う上で必要な乗馬技術、ゴルフの服装マナーなどは、エリートの身体を形作るものであり、そこで培われた身体資本が、人間関係の拡大といった社会関係資本に転換されたり、エリートとしての自己を引き立たせる文化資本へと転換されたりしていくのである。

以上のような、身体資本概念を本稿のパースペクティブと照らし合わせてみよう。スポーツ選手は、プロスポーツ選手のようなスポーツエリートとしての身体を獲得するために身体資本の生産をする。スポーツを通して培った身体資本は、単に身体能力や競技技術といっただけのものに還元されるだけでなく、指導者やチームメート、OB などの人間関係（社会関係資本）や推薦入学をするといった学歴の獲得（学歴資本）、プロスポーツ選手のように金銭の獲得（経済資本）といった形で様々な資本に転換されていくのである。このように考えると、スポーツ的選抜で勝ち上がっていくためには、ただ単に身体能力や競技技術を高めていくのみならず、それらを含めた身体資本を、いかにして他の資本に変換して多大な利潤を得ることができるかというところに懸かっている。たとえ、大きな身体資本を有したスポーツ選手であっても、指導者との折り合いがつかず、身体資本を社会関係資本に転換することが上手くいかなかった場合、その選手はスポーツ的選抜の中で不利な立場となってしまうであろう。

次節では N. エリアス & E. ダニングによるスポーツの歴史社会学的研究（エリアス & ダニング 1995）や J. ヴィガレロ、A. コルバンらによる身体に関する社会史研究を基に、以上述べてきたような、人々の身体資本の取り扱いの変遷について考察していく。周知のように、スポーツは近代国家の成立とともに立ち現れた。私たちが現在当たり前のように行うスポーツは近代の産物であったといえる。まずは、西洋における近代スポーツ誕生の変遷を追うことによって、わが国の近代スポーツ受容についてより明瞭に理解することができると考えられる。

### 3. スポーツの成立とブルジョワ階級の相対的衰退—スポーツと文明化を中心に—

#### 3-1. スポーツ化の時代

スポーツはいかにして成立したのか。エリアス & ダニングの共同研究は、この問いを「文明化の過程論」<sup>(2)</sup>

から解き明かそうとする。この共同研究は、イギリスのレスター大学に赴任したエリアスが、1959年頃に大学院に進学した、熱心なサッカーとクリケット選手であったダニングにフットボールの社会学的研究をしてはどうかと薦めたことから始まる。しかし、どうしてスポーツを文明化の過程として分析したのか。エリアスらは、スポーツに備わる暴力性について、以下のように述べる。

あらゆるスポーツは本質的に競争的であり、それゆえ攻撃性と暴力性を喚起する。しかし、いくつかのスポーツ、たとえば、ラグビー、ボクシングでは、ふたりの人間、ふたつの集団の間の「遊戯的戦い」、あるいは「模擬戦」というかたちをとる暴力が重要な要素になる（エリアス&ダニング 1995, p.332）。

エリアスらによれば、スポーツには暴力が行使される側面、すなわち、文明化の過程によって閉じ込められたはずの、身体が他者の身体を攻撃するという側面が存在する。しかしスポーツは、このような暴力的側面を規制するためのルールによって、遊戯的側面や模擬戦的側面を形作っていく。「スポーツ」と「スポーツでないもの」の違いは、このような暴力の抑制の有無で分けられる。そして、「スポーツでないもの」が「スポーツ」に変化するという「スポーツ化(sportization)」の過程は、19世紀のイギリスで進行したのである。

ここでは、フットボールのスポーツ化についてみていこう。フットボールの原初的形態について、エリアスらは次のように述べる。

「フットボール」と呼ばれる球技へのかなり信頼できる言及がイギリスの資料に見られるのはだいたい十四世紀以降のことであるが、フットボールという名前の正体をたどってみても、ゲームそのものの本質は少しも明らかにならない（エリアス&ダニング 1995, p.253）。

十四世紀のフットボールなるものは、きわめて「暴力的」であり、祭日などに行われたゲームは選手の人数も一定ではなく、ボールをゴールまで運ぶのを阻止するために殴り合い、骨折や脱臼、死者が出ることもあった。このような「野蛮なフットボール」は、どれだけ暴力的なものであろうとも、民衆は好んで行った。

しかし、治安維持に不安を感じた国王や市当局は、「フットボール禁止令」を發布し、ゲームの禁止、あるいは禁止措置を無視する者を裁いていく。それはある種、「国家による暴力の独占」（エリアス 2004 p.161）の過程である<sup>(3)</sup>。「野蛮なフットボール」は19世紀には消滅していくわけであるが、一方で別の種類のフットボールがパブリックスクールにおいて成立する。1830年頃、ブルジョワ層が多く入学する新興校ラグビー校は、「紳士」と「民衆」を区別する振る舞いを教育するための改革として、野蛮な面をなくしたような、「紳士のゲームとして適切なフットボール」を導入したのである。暴力を規制するためのルールが成文化され、ルールに反した暴力的行為には厳しく処罰が与えられるようになる。その後、他のパブリックスクールも独自の形でフットボールの野蛮性を排除していく。たとえば伝統校であるイートン校は、手を用いてボールを運ぶラグビー校のフットボールとは反対に、人間の身体最高の器官である手の使用を禁じていくのである。ラグビー式とイートン式のフットボールはその後、それぞれ独自にルールを改変していくが、ラグビー式を支持する者達が「ラグビー・フットボール・ユニオン」を、イートン式を支持する者達が「フットボール協会」を設立する。すなわち、現代におけるラグビーとサッカーとして、「スポーツ化」がなされていく。

これまで、「野蛮なフットボール」の暴力的側面が文明化の過程によって抑制され、ラグビーやサッカー

としてスポーツ化されていく過程をみてきた。エリアスらは更に踏み込んで、なぜ「スポーツ化」がこの時期のイギリスで生じたのかについて言及する。イギリスの十七世紀は、「暴力の時代」であった。チャールズ一世による清教徒の逮捕・処刑、その彼が清教徒であるクロムウェルによって処刑されるなど、暴力のサイクルで政治が成り立っていたのである。しかし、十八世紀になれば、穏やかに競争集団の政権交代が行われる「議会主義化」が生じる。暴力や暴力に結びつく術策のような政治技術は、非暴力的な形の競争、すなわち議論、演説、説得等の言葉の技術にとって代わるようになる。このようなイギリスの権力構造の変化は、ブルジョワ階級の余暇の形態をも変化させることになる。エリアスの言葉を借りるならば、「自己統治的な貴族とジェントリーの発展がスポーツの発展において決定的な役割を果たした」（エリアス&ダニング 1995, p.48）のである。

「文明化」した人々は暴力に対する嫌悪感を持ち、国家による暴力の独占は、民衆の身体から暴力を剥奪する。民衆の娯楽であった暴力的なスポーツも、成文化されたルールによって自己抑制を促されることになる。このような自己抑制された身体は、ブルジョワ階級の身体として機能していき、スポーツはブルジョワの身体を形作る一手段となっていくのである。その意味で、「スポーツ化」は「文明化の過程」と同じ方向の変化とあってよいといえる。

### 3-2. 身体の外部的への投資

エリアスらが明らかにしたように、スポーツ化は、文明化の過程によって、民衆の暴力を抑制していくことである。成文化されたルールによって規制されたスポーツは、ブルジョワ階級の自己抑制された身体を形作る機能を担うようになっていく。このような19世紀におけるスポーツの転換期について、もう少し詳しく見ていこう。

パブリックスクールにおいて大きく発展したスポーツは、フェアプレーやスポーツマンシップといった精神が付け加わることになり、「健全なる身体に健全なる精神が宿る」といったアマチュアリズムを創り出すことになった。現代におけるアマチュアリズムは、単純に素人といった意味が先行し、プロフェッショナルリズムの対義語として捉えられる。しかし、19世紀のイギリス社会で社会通念として認識されていたアマチュアリズムは、パブリックスクールから輩出された「ジェントルマン」のヒューマニズムの教養にフェアプレーの精神を加えること、そしてスポーツを生業としないこと、スポーツ自体を目的として楽しむものでなければならぬことといった意味を持っていたのである。

一方、このようなアマチュアリズムは、19世紀後半の近代オリンピックが創設される際にも、大きな理念として掲げられた。J. コークリーは以下のように述べる。

近代オリンピックを組織した裕福な貴族たちは、自らの権力を使い、世界中の富裕層出身選手に特権を与えるようにアマチュアを定義し、労働者階級出身選手を排除した（コークリー 2011 p.149）。

ここからは、ブルジョワ階級がアマチュアリズムの理念を基にスポーツを独占していき、自らの再生産戦略としてスポーツを利用していることが分かる。労働者階級出身の選手とは、プロフェッショナルな選手のことであり、競技を通して金銭的報酬を得るものであった。しかし、彼らは野蛮な者として、スポーツの世界から排除されてしまったのである。

このような19世紀イギリスにおけるスポーツを取り巻く状況の中で、身体資本の生産と変換はどのように行われていたのだろうか。ここでは、アナール学派歴史学者のG. ヴィガレロによる、19世紀ヨーロッパ

の「鍛えられた身体」に関する分析を参照しよう。ヴィガレロは、当時のスポーツ活動に関して以下のように述べる。

アマチュアの新しいエリートたちは特別な身体トレーニングという考えを受け入れなかった。彼らが行っていたスポーツは人間の身体の生来の特質を大切にした。(中略) 第一世代のサッカー選手たちの中でもっとも有名なのは、チャーターハウス校やオックスフォード大学で活躍したG・O・スミスだが、彼は当時を回想して「誰も練習などしなかったし、その必要はまったく感じられなかったと断言できる」としている(ヴィガレロ 2010 p.401)。

ブルジョワ階級の者は、身体を「鍛える」ということは行っていなかった。すなわち、彼らは、身体訓練をする形で身体資本への投資を行っていなかったといえる。ヴィガレロは、19世紀から出現し始めたスポーツウェアに着目し、以下のように述べる。

アマチュアのスポーツ選手は服装にも大きな重要性を与えた。(中略) クリケット選手はそれまでのくつろいだ服装を捨てて、白いウェアを身に着けた。ブーツ、ズボン、シャツ、白いセーターが一八八〇年代以降には一流選手たちのユニフォームとなった。名選手たちはウェアを汚さずに真っ白に保つことを誇りに思ったが、それは自分たちのスポーツの純粋性や美しさを象徴的に強調することで旧来のスポーツとの差別化を図る手段でもあった(ヴィガレロ 2010 p.403)。

ブルジョワ階級出身の選手は、スポーツウェアを着用することによって、旧来のスポーツ、すなわち労働者階級の間で行われていたスポーツとの差異化を試みている。彼らが準拠していたのは、「健全なる身体に健全なる精神が宿る」というアマチュアリズムであったが、「健全なる身体」とは、「鍛えられた身体」ではなく、「着飾った身体」であるといえる。すなわち、彼らは身体を「鍛える」形で身体資本を生産していたわけではなく、「着飾る」形で身体資本を生産していたといえる。彼らの身体資本の投資は、自らの身体の「内部」(肉体そのもの)に向けたわけではなく、身体の「外部」(服装や外見)に向けたものであったといえるであろう。ブルジョワ階級の者にとって、生産された身体資本を社会関係資本へと変換する場となっていたのである。

以上、19世紀におけるスポーツ活動の状況を概観してきたが、当時のスポーツの目的は、ブルジョワ階級の再生産戦略にあったことが分かる。一方、労働者階級の者は、競技によって金銭的報酬をもらうようなプロ選手であり、スポーツ的選抜をされた者であるともいえる。しかし、彼らが行っていた競技は、暴力的で悪質な賭博が横行するものであり、スポーツといえるようなものではなかったのである。その意味で、現在のようなスポーツ的選抜のような形は存在することなく、ブルジョワ階級の再生産を主要な目的とした、「属性主義型スポーツ的選抜」とでもいう形で構造化されてきたといえるのではないか。

### 3-3. 身体の内面への投資

エリアスらがスポーツを分析する際に、文明化の過程という分析枠組みを用いた点で興味深いのは、文明化の過程に終わりがなくことである。すなわち、「スポーツ化」を果たした後も、スポーツは様々な変化していく。エリアスらは、初期のスポーツ化、すなわち地理的な意味で「地方主義」であったスポーツが、国家単位へと拡大していく過程を以下のように描いている。

(産業社会は) 比較的、国家的に統一されており、すぐれた輸送・伝達手段、共通のルールのあるスポーツ、そしてある程度の「コスモポリタニズム」を備えている。それはつまり、各地の集団がそれぞれの集団を潜在的な敵と見なし、地理的に隣接していない他の集団と自分の集団を比較してみたくなるといふことを意味する (エリアス&ダニング 1959, p.322)。

オリンピックやワールドカップなどの国際大会は、産業社会という文明化の過程を経て、世界共通のルールや世界的に統合された競技組織によって形作られる。そこでは、自分のためにプレーをする「紳士」から、金銭と地域の名誉のためにプレーする「プレーヤー」へと変化していくことになるのである。すなわち、スポーツはますます「真剣なもの」となっていくといえ、それはある種、スポーツがブルジョワ階級の身体から離脱し、国家 (あるいは国民) によるスポーツの独占が始まった瞬間とも考えることができよう。現在のようなスポーツ的選抜が社会的機能を持ち始めるのは、このように国家がスポーツを管理し始めたことが契機となったとも考えられる。

このような高度なスポーツ化を促すきっかけとなったのが、「スポーツの大衆化」であると考えられることはできないか。文明化が進むにつれて、スポーツに接する機会のなかった階級の者達がスポーツの魅惑に惹かれていく。それは、20世紀に生じた余暇活動における「ブルジョワ階級の相対的衰退」(コルバン 2000, p.59) が大きな要因となっていたといえよう。

A. コルバンは、余暇活動、すなわち自由時間の使い方に関する社会史研究の中で、鉄道網の整備が余暇活動の大衆化の大きな要因になったと述べている。大量の人を、短時間に長距離移動させることを可能にした鉄道は、労働者階級までもリゾート地へ運ぶことになった。海水浴や避暑地などにおける余暇活動が自らの特権であったブルジョワ階級は、労働者階級からの差異化を図るために新たな余暇活動を開発していく。しかし、鉄道をはじめとしたテクノロジーの革新によって、余暇活動は労働者階級によって浸食されることになる。これと同様に、ブルジョワ階級出身選手によって独占されていたスポーツも、労働者階級選手によって浸食されていったと言えるのではないだろうか。

そのような中で、肺活量を計測する「スパイロメーター」や、呼吸のリズムを表す「呼吸記録器」の発明といったテクノロジー革新は、身体の緻密な計測を可能にしていき、肉体の管理、トレーニングの直接目に見える形での結果を明らかにしていく。

運動能力が測定される。潜在能力は予見される。(中略) 身体の成長と今後の予測を客観化するためだ。たとえば、胸囲を一〇センチ、首、二頭筋、ふくらはぎを四・五センチ、肩周りを一五センチ太くするために、三ヶ月のレッスン。効率というテーマが、このようなデータの中で優位を占めている (ヴィガレロ 2010 p.208)。

テクノロジー革新によって発達した計測技術は、スポーツのあり方を変容させることになる。たとえば陸上競技では、100メートル走のタイムを1000分の1単位まで計測することによって、いかに人間は人類最速に近づくことができるかといった新たな目標ができることになる。そこでは、身体の限界を顧みることなく、未踏の領域を探求しようとする欲求が押し寄せてくることになるであろう。自らの身体能力を高めるために「トレーニングする身体」が誕生することになるのである。

このような「トレーニングする身体」の誕生によって、身体資本の生産は、身体の内部に向かうことにな

る。人々は、「鍛える」ことによって身体資本を生産し始めたのである。身体を強靱に発達させるということのみならず、身体のすみずみまでも意識するようになり、極限的には脳からの指令の伝達速度をどこまで高めることができるかということまで探求をし始めることになる。このことは、「健全なる身体に健全なる精神が宿る」というアマチュアリズムの精神における「健全なる身体」も変容を迫られることになるであろう。「健全なる」身体は、自らの外見を整えるために「着飾った」身体ではなく、質実剛健な「鍛えられた」身体といった意味を持つことになるのである。

アマチュアリズムを体現する場であったオリンピックにおいても、近年ではプロ選手の参加が多くみられるようになった。1984年のロサンゼルスオリンピックから、一業種一社のスポンサー企業を募ることになり、スポーツを通して生じる金銭的報酬を忌み嫌っていた、かつてのアマチュアリズムの精神は形骸化していると言わざるを得ない。極限まで鍛えられ、人類未到の境地を目指すプロスポーツ選手の身体に向けられたまなざしは、やがてスタジアムを形成することになり、スポーツは観るものに変容した。しかし、スポーツ選手の身体が脚光を浴びるたびに、その陰の部分が浮き彫りになる。スポーツ選手の身体は、多額の金銭でやりとりされる商品と化し、さらに大きな利潤を得るために自らの身体を改良していく。自らの身体資本を、経済資本（金銭）へと変換するようになったのである。

このように、スポーツを通して得た身体資本を経済資本へと転換するようになった状況は、スポーツがブルジョワ階級の再生産の手段となっていた「属性主義型スポーツ的選抜」とは言えないものになっている。それは、競技技術や身体能力の発揮による業績を基にしたような、「業績主義型スポーツ的選抜」の姿であるといえるだろう。身体資本の投資が身体の外部から内部へと向かっていくことによって、現在のような商業化されたスポーツシステムが創られたといえる。

これまで、西洋におけるスポーツ化の過程を、身体資本の生産と変換という枠組みから概観してきた。次節では、明治期の日本に舞台を移し、近代スポーツの一つとして野球の受容過程を、同様に身体資本の枠組みから分析していく。

日本における近代スポーツ受容過程を追っていくことによって、本稿冒頭でも述べたような、野球特待生問題のような現代的現象に対しても再考を図ることができると考えられる。

## 4. 日本における近代スポーツ受容

### 4-1. 一高式武士道野球

1873（明治六）年に開成校（現東京大学）の外国人教師たちの指導のもと、日本人は初めて野球を行なったとされている。当時の野球は西洋の武芸十八番としてのハイカラ風な雰囲気であったが、開成校が東京大学予備門と改称され、工科予備校と法科予備校が合併して第一高等学校（以下一高）へと改められていくなかでバンカラ風な雰囲気が形成されていったのである。明治二十年代後半から明治三十年代前半にかけて西洋から輸入された野球や漕艇、日本古来の武道を学生の校友会として組織化したのは一高校長木下広次であった。菊幸一（2009）によると木下は、一高の生徒は国家によって選ばれた人材なのだから、明治時代における四民平等の急速な大衆化の流れの中でエリート精神を涵養しなければならないと考えていたという。そのようなエリート精神を養う場として、野球部も機能していくことになる。そこでは後に「武士道野球」と呼ばれるような、礼の精神、体を張る武士的素養、恥を知る精神など武士道的精神が、一高野球部の中心に据えられていた。

このような精神主義的鍛錬の背景には、初代文部大臣森有礼による国家主義教育の影響を大きく受けてい

ためである。森有礼によって国家のエリート養成の基盤として位置付けられた一高であったが、それに伴って無作法な世間の空気に触れないために「校外一步皆敵」という「籠城主義」が掲げられることになった（清水 1998 p.127）。籠城主義が掲げられた一高において、野球部の対外試合での敗北は決して許されないものであったという。そこでは、精神的身体的鍛錬のための激しい練習が行われていたのである。すなわち、当時の一高におけるスポーツは、単なる娯楽としてではなく、将来の国家を背負う一高生としてのエリート精神を守り貫くといったような「校風発揚の場」であったといえるだろう。

それは、19世紀イギリスにて生まれたアマチュアリズムの精神とは全く異なったものである。前節でも述べたように、イギリスブルジョワ階級の身体とは、「着飾った身体」として表象される。すなわち、スポーツを通じた身体資本の生産は、身体の「外部」への投資に重点化されることによって行われ、そこで生成された身体資本そのものは、彼ら自身の再生産戦略の中で様々に変換されていくのであった。それに対して、武士道野球においては、精神主義的鍛錬として激しい練習が行われていたことから、「鍛えられた身体」、すなわち身体資本の投資先が身体の「内部」へと向かっていることが分かるであろう。

このような差異に関しては、日本ファシズム教育の要として、スポーツとナショナリズムの結びつきが要因として考えられる。日本的ナショナリズムの特徴は、「封建的ヒエラルキーを完全に一掃することなく、その温存を基礎として、前近代的なプロイセン流の君主制を支柱に、絶対主義的な天皇制体制の創出をはかった」（入江 1986 p.17）点にある。そのため、近代的な啓蒙思想や人権思想は定着することが困難となり、国民の政治的自由は抑圧され、臣民としての義務と服従が強制されることになったのである。こうした中で、近代スポーツは、国家主義としてのナショナリズムに向けて国民を臣民化していく合理化運動であったといえる。

たとえば坂上康博は、大日本体育学会の機関誌『体育と競技』の8巻6月号の巻頭言における次のような記述からも、スポーツとナショナリズムとの関係性が浮き彫りになっていると主張する（坂上 1998 p.12）。

シティズンシップの訓練は、スポーツで十分出来ると思ふが、国民的訓練は、どうしても武道に頼らなければならぬと思ふ。我々は、お互に、善良な市民でなければならぬと同時に、忠良なる国民でなければならぬのであるから、スポーツマンであると同時に、国士たらんことを必要とする（大日本体育学会『体育と競技』巻頭言1929年6月号p.2）

ここには、武道の国家的意義を再認識させ、スポーツを「武」的なものと捉えることによって、国民の思想善導を目指そうとする主張が見て取れる。そして、前述したような一高的武士道野球の根本精神である「武士道的精神」も、西欧列強を目指し、富国強兵を目論む日本国家において、権力装置として機能していたと言えよう。一高などの国家のエリート養成機関において、武士道的精神は国家権力の意思を身体化する機能を果たしていたのである。

しかし、武士道野球の隆盛も長くは続かず、それにともなって野球のありかたも様々に変化していくことになる。次に、現代日本の風物詩として行われる「甲子園野球」の成立までをみていこう。

#### 4-2. マスメディアイベントとしての甲子園野球

全国各地で学生野球が興隆する一方、一高野球は学内での籠城主義批判や校風に対する批判、校長に就任した新渡戸稲造による「教養主義」の隆盛などの反発によって衰退していくことになった。その後、早稲田・慶応を中心に野球が広く普及していくなかで「東京朝日新聞」において「野球界の諸問題」（1911年8月20

日～24日)、「野球と其害毒」(1911年8月29日～9月19日)と題する一連の連載記事が展開された。いわゆる「野球害毒論争」である。私立大学の台頭と相まって、学生達のなかで人気を得ていた野球が、教育家たちに「害毒」として認識されるようになったのである。野球の「害毒」として挙げられるものとしては、「学力不振を引き起こす」「野球人気による華美な選手の形成」「私立大学の広告利用」など多岐に渡るが、野球擁護派の応戦などによって議論は白熱した。朝日新聞社は、野球害毒論争の一年前に以下のような記事を掲載している。

野球の覇権が一高の手から離れて早稲田慶応に移るや野球は著るしく俗化した。一高の蛮骨等は神聖な校技として野球を崇拜していたが、慶応、早稲田は之を学校広告に利用した。野球が今日の興業化をなした原因は此処にある(東京朝日新聞1910年11月25日付朝刊)。

このように、一連の野球批判のなかで朝日新聞社が準拠しているのは、勤儉尚武の武士道野球であり、一高野球の理念に立って現状の「俗化」を批判しているのである。以前の野球界の覇者であった一高野球の「武士道的精神」と対比する形で、当時隆盛を誇っていた早稲田・慶応野球をやり玉に挙げていたと考えられる。

こうした野球害毒論争が現在夏の甲子園大会を主催している朝日新聞社によって引き起こされていることは非常に興味深い。朝日新聞社は野球害毒論争で取り沙汰された諸批判をもとに、学生野球の「監視・指導」(清水 1998 p.213)をするという立場から甲子園大会の原型である全国優勝野球大会を主催していく。学生野球の「精神」を中核としたマスメディアイベントとしての「甲子園野球」の誕生である。

朝日新聞社は、毎日新聞社との激しい経営競争のなかで、甲子園野球を利用した販売・広告の拡張を狙っていた。しかし、経営戦略としてのマスメディアイベントは、社会的に大きな意味を持つ物語を大衆に向けて提供・増幅し、社会に広く浸透させなければならない。単なる野球の試合を淡々と報道するだけでは、他紙との差異化を図ることができないからである。そこで朝日新聞社が持ち出した物語は、アメリカ発祥のベースボールではなく、日本独自の「一高式武士道野球」であった。「武士道的精神」を基調とした日本独自の野球、それも全国の代表が集う大会であることを強調することによって、新聞のイメージアップを意図していたと考えられる。しかし、「野球害毒論争」でも見られるように、野球を痛烈に批判する教育家達はまだまだ多く存在し、一高で行われていた野球をそのまま具現化するだけでは、マスメディアイベントとして社会に広く浸透することはできなかった。朝日新聞社にとって、一高式武士道野球の中心に据えられた武士道的精神をいかに再解釈するか、いかにして美しい物語を形成するかということが最大の課題であったのである。

再解釈の一つとして挙げられるのが、武士道野球に「娯楽性」を付け加えることである。「凡てを正しく、模範的に」というスローガンの基に開催された甲子園野球において、試合前に選手達が整列して礼をするなど、武士道的精神から引き継がれたものはあった。しかし、甲子園野球が大衆向けの娯楽として機能しなければ、マスメディアイベントとして成立することは困難であるため、朝日新聞社は、野球というスポーツを「指導・監視」するとともに、観客を熱狂させるような「娯楽性」を形成するという二つの役割を担っていたのである。

たとえば、学生野球の父と呼ばれる飛田穂洲は、甲子園野球が持つ特徴を以下のように述べている。

純潔そのままの心をフィールドに傾けて根限りに闘ふ。技術者は若さがあり不足はあつても、終止試合を支配する熱度は試合を美化して剩すところがない(飛田穂洲1929「日本魂の行列」『全国中等学校野球大会史』朝日新聞社編p.112)。

純真無垢に野球に熱中する若者達の姿が、甲子園野球の熱気を創り出し、観客は「若者らしい」純真な精神に共鳴し、感動するのである。このような「若者らしさ」というノスタルジーを喚起させる「娯楽性」を付与することによってはじめて、甲子園野球がマスメディアイベントとして機能すると考えられる。

以上述べてきたように、朝日新聞社は野球を管理し、様々に再解釈を行ってきた。エリアスらがいうように、高度なスポーツ化という現象は、スポーツがブルジョワ階級の身体から離脱し、国家（あるいは国民）による独占がなされることによって生じる。朝日新聞社による「管理」は、一高や早慶といったエリート養成機関の中で閉じられていた野球を解放し、甲子園大会という形で「大衆化」させることになったと考えられよう。

このように新聞やテレビを通して多くの注目を集める野球選手たちの身体は、「観られる身体」と化し、武士道野球における一高生の身体とは異なったものとして表象されていく。激しい練習によって培われた身体資本が、さまざまに批評され、「評価」されていくことになるのである。このような身体資本の評価は、冒頭で述べたような野球特待生や、多額の金銭を拝受するプロ野球選手を例にとっても分かるように、身体資本が学歴資本や経済資本へと様々に変換されるか否かを定める指標となったということもできる。スポーツ的選抜、すなわち、スポーツを通じた進路選択は、籠城主義的に閉じられた身体資本が、世間のまなごしを集めることによって成立可能となったといえるだろう。

## 5. 結語

エリアスらは、「スポーツでないもの」が「スポーツ」へと変化していく過程を、暴力的側面の排除、そして国家によるスポーツの管理といった「文明化の過程」と同様の方向の変化として捉えた。日本における野球も、バンカラ風な武士道野球が、朝日新聞社によって「凡てを正しく、模範的に」再解釈され、マスメディアイベントとして大々的に管理されていくことによって、現代のような高度なスポーツ化がなされたといえるだろう。そして、スポーツを通して生産された身体資本は、評価の対象となりながら様々な他の資本へと変換されることによって、スポーツを通じた進路形成は可能になったといえる。無論、このような高度なスポーツ化は、本稿冒頭でも取り上げたような「プロ野球裏金問題」や「特待生問題」のように負の側面をも生成させることになってしまったのである。

このような問題現象を如何にして是正するかということに対しては、本稿の範疇を超えてしまっているが、エリアスが、スポーツ化の過程、すなわち文明化の過程に終わりが無いというように、今後もスポーツのあり方や、選手たちの身体を取り扱われ方は変容していくと認識することが重要であるといえるのではないか。

近年のわが国におけるスポーツ状況を垣間見ても、2020年東京オリンピックが開催されることを皮切りに、スポーツ庁が設立された。それまで文部科学省や厚生労働省など、複数の機関にまたがって管轄されていたスポーツが、一本化されることになったのである。エリアス的な視点から見ると、国家によるスポーツの管理が強化されたことと捉えることができるわけであるが、このような制度的改変が、これまで生じた問題現象を排除していくことになるのか、あるいは、また新たな問題を生み出してしまうことになるのであろうか、注目に値するといえるだろう。

### 注

- (1) 「さまざまな階級や行為主体が、経済投資と文化投資とにそれぞれいかなる役割を付与しているのかをも、かれら（経済学者）は説明できていない。なぜなら、さまざまな市場で諸階級に約束される利益の機会には、

それらの階級が手にする相続資産の量と構造に応じて差がついているという構造を、かれらは体系的に考察していないからである」(P.ブルデュー 1986, p.19 括弧内筆者)。

- (2) エリアスは、「文明化」しているといった「自己意識」を持つ人々の自己意識そのものを探求していく。そこでエリアスは、1530年に出版されたエラスムスの『少年礼儀作法論』などのマナー指南書の変遷を巡ることによって、文明化の過程を紐解いていく。そこでは、人々が「動物的性格」と感じる一切のものを、いかに排除していくかということが描かれている。
- (3) エリアスは、「国家の社会発生」は、「肉体的暴力の独占」と「租税の独占」といった二つの独占から成り立つと述べている。前者は、封臣(封建制度における臣下)から戦争を起こす力を取り上げ、「肉体的暴力」を国家の軍隊という「専門家機械」が独占していくことを表す。後者は、国王が貴族や市民に保護と特権を与える見返りに、「援助金」を課税する「緊密な依存関係」から成り立つ。国王への反発は、国家の「暴力の独占」のゆえに不可能になる。

#### 引用参考文献

- コルバン, A 2010 『レジャーの誕生(上)』. 渡辺響子訳. 藤原書店
- 石坂友司 2003 「野球害毒論争(1911)再考」. 『日本スポーツ社会学研究』. 11 : pp.115-127
- 菊幸一 1993 『近代プロ・スポーツ』の歴史社会学—日本プロ野球の成立を中心に—, 不味堂出版, pp.76-99
- 栗山靖弘 2011 「スポーツ特待生の進路形成—高校球児の事例を通して—」. 『社会学ジャーナル』. 37 : pp.167-183
- エリアス, N&ダニング, E1995 『スポーツと文明化』大平章訳. 法政大学出版局
- エリアス, N 1978 『文明化の過程(下)』. 赤井慧爾訳. 法政大学出版局
- 小野瀬剛志 2002 「野球害毒論争(1911年)に見る野球イデオロギー形成の一側面」. 『スポーツ史研究』. 15 : pp.61-71
- ブルデュー. P 1986 「文化資本の三つの姿」. 福井憲彦訳 『象徴権力とプラチック』, pp.18-28
- Peter Cave 2004 "Bukatsudo: The Educational Role of Japanese School Clubs", *Journal of Japanese Studies*, 30, pp.383-415
- 坂上康博 1998 『権力装置としてのスポーツ』. 講談社, pp.82-127
- Shilling, C (1993) *The Body and Social Theory*. SAGE
- 清水論 1998 『甲子園野球のアルケオロジー』. 新評論, p.105, 127, 134, 213
- 鈴木康史 1999 「近代日本における「文化」と「スポーツ」の起源に関する研究」. 『体育・スポーツ哲学研究』, 21 : pp.9-23
- ヴィガレロ, G 2010 「トレーニングする身体」, 『身体の歴史Ⅲ』, 今村傑訳, 藤原書店, pp.197-240
- 黄順姫 2005 「「信頼資本」, 「社会的資本」蓄積の場としての部活動」. 『社会学ジャーナル』. 30 : 85-125

## The Historical Establishment Process of Career Choices of Sports Scholarship Students

TAKADA Shunsuke

Through a scouting scandal in which two amateur baseball players were paid money under the table by a professional baseball team in 2007, the existence of the baseball student became obvious. A baseball scholarship student results when a good baseball player is exempted from school expenses or is supported by a scholarship. Unlike European sports culture, which has developed through centering on the local community, Japanese sports culture has been growing based on school education. Therefore, it can be said that the career choices of sports scholarship students are phenomena that are peculiar to the case of Japan.

The purpose of this article is to clarify the historical establishment process of sports scholarship students through surveying the transition period of Japanese sports from the reception of modern sports to its advanced development. In regards to method, this article bases its research on the concept of “body capital” (Shilling 1993), and analyzes the transition of body capital from the period of production to conversion. As a result, this study clarified that the body capital, which is cultivated by sports, has gradually developed into several other capitals through transforming “Bushido Baseball,” which aimed to nurture the elite at the time of the Meiji period, into “Koshien Baseball,” which was formed by the mass media.